

ステップファミリーを経験した青年による3人の親評価

— PAC分析を援用して —

野口 康彦

小野 綾花

要旨

本研究では、親の離婚・再婚を経てステップファミリーを経験した4人の継子の親評価に焦点をあて、当事者の体験についてPAC分析（Personal Attitude Construct；個人別態度構造分析）を用いて、探索的に検討を行った。調査では、1人の調査協力者につき、「同居する実親」、「同居する継親」、「別居する実親」という3人の養育者（親）の存在や意義、そして、親としてのイメージや感情について問いている。親の離婚・再婚を経験した継子は、「同居の実親との関係の再構築」に直面し、「継親が実親ぶらないこと」から継親子という新たな家族を受け入れつつ、その一方で、「記憶の中の別居親との細い繋がり」が残されていることが窺えた。親の再婚を経験した青年継子は、自身の家族イメージを周囲が持つ家族の基本イメージと照応しながら、「家族とは何か」という問いについて常に自問している。新たなパートナーとの関係の形成に目が向きがちな親の体験とは異なり、継子の経験する家族意識の複雑さへの認識の理解が深まった。

1. 問題と目的

1. 関心の所在

「ステップファミリー（stepfamily）」とは、夫妻のいずれかあるいは双方が、以前のパートナーとの子どもを連れて再婚することによって形成された家族を指す（野沢，2005）。夫婦の婚姻より前に実親子関係が成立しており、家族内に継親子関係を含むことなど、初婚家族とは構造も発達の仕方異なる点に特徴がある（SAJ，2017）。

夫婦にとって、離婚は継続不可能となった婚姻関係の解消であり、再婚は新たなパートナーとの再出発という意味を持ち得る。しかしながら、未成年の子どもがいる夫婦の離婚や再婚の場合、大人の婚姻関係に伴う親のライフイベントを、子どもも一緒に経験するという構図が出来上がる。子どもにとって、親の離婚は家族の崩壊と別居親との親子関係の断絶に繋がりがねず、また再婚は継親・継きょうだいとの新たな関係を築くことへのプレッシャーやストレスを生み出すこともある。親とは異なる立場で離婚・再婚を経験する子どもの心理的影

響は、どのようなものであろうか。

2. ステップファミリーが抱える課題

夫婦のどちらかが未成年の子どもを連れたステップファミリーは、実親子の関係が先にある中で、親が新しいパートナーとカップル関係を築いて夫婦となる。初婚家族の場合、夫婦は子どもが生まれる前に互いの価値観をすり合わせつつ、家族として生活をともにする時間を確保することができる。しかし、ステップファミリーにおいては、長い時間をともに過ごしてきた実親子間で、すでに価値観や生活習慣が出来上がっていることから、新たに婚姻関係を結んだカップルでは、価値観や生活習慣の違いによって混乱が生じやすい。親子関係、また夫婦・カップル関係の始点が初婚家族と異なるという構造的側面は、ステップファミリー特有の難しさを生み出す要因の一つといえる。

野沢ら（2014）はステップファミリーの継親子関係に焦点をあてて、若年成人継子を対象としたインタビュー調査と、それに基づいた探索的なケース分析を行った。調査で得られた19ケースは「①親として受容」、「②思春期の衝突で悪化」、「③関係の回避」、「④支配従関係から決別」、「⑤親ではない独自の関係発達」の5つの類型に分類され、「継子が継親を親とみなすのかどうか」、また「継親自身も継子の親として振る舞うのか」が分類の重要な軸として浮上した。

さらに、野沢（2015）は上述した調査を発展させ、同じインタビュー・データと分析方法を用いてステップファミリーにおける実親子関係にも目を向けた。調査で得られた19ケースは「①重要な仲介者・擁護者である親に肯定的な評価」、「②継親の側に立つ親に対する失望・疎外感」、「③自分を気遣わない親への不信・距離化」の3つに類型化された。中でも①に分類されたケースで同居親が肯定的に評価されていたことから、同居親の継親子関係を調整する位置の意識を持つことと、親としての役割を積極的かつ継続的に果たすことが、子どもの良好な適応状態に繋がると述べている。継子の適応において、継親子関係をいかに築くか、継親子関係の構築に同居親がどのように介入するかが重要な命題であり、そこには親子関係や夫婦・カップル関係の有り様、離婚・再婚による環境の変化、それに伴うストレスの大きさといったさまざまな要因が複雑に絡んでくるといえる。

3. 本研究の目的

本研究では、親の離婚・再婚を経てステップファミリーを経験した継子の親評価に焦点をあて、当事者の体験についてPAC分析（Personal Attitude Construct；個人別態度構造分析）を用いて、探索的に検討することを目的とする。PAC分析は、内藤（1997）によって開発された、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する質的分析方法である。親の離婚・再婚を経験した子どもは、同居実親と別居実親に加えて、継親との関係に悩まされやすい。よって、本研究では、1人の調査協力者につき、「同居する実親」、「同居する継親」、「別居する実

親」という3人の養育者（親）の存在や意義、そして、親としてのイメージや感情について問いている。分析を通して、青年期を生きる彼らの親イメージや家族観について、それぞれの親子関係の有り様から検討したい。

世帯の形態としてのステップファミリーは、標準的な初婚核家族世帯と区別されにくく、正確な数を把握されることもなかったため、学術的な調査研究や公的な支援政策の対象となることがほとんどなかった（早野，2008）。だが、未成年子を有する離婚件数の増加と再婚件数の増加、インターネット利用によるステップファミリー経験者同士のネットワークの形成・拡大などによってその社会的認知は拡がりつつある。支援のニーズが認識されるようになったことで、ステップファミリーの親子関係については、社会学や社会福祉学などの領域で研究が進められてきた（小田切，2004；勝見，2014）が、それらは実親・継親とのそれぞれの親子関係についての検討が主であり、1人の継子に対して、「同居する実親」、「同居する継親」、「別居する実親」という3人の養育者との関わりについて、当事者の体験をもとにした個別的調査を行ったものは見当たらない。ステップファミリーを経験した子どもの支援においては、親子関係の新たな再構築あるいは親の再評価に関する調査・研究の蓄積が求められており、本研究はその一つとなるであろう。

II. 調査方法

1. 調査の方法とねらい

本研究では、内藤（1997）が提案したPAC分析（Personal Attitude Construct；個人別態度構造分析）を調査研究の手法として採用する。PAC分析は、当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告を通じて、個人内の態度構造を分析する方法である（内藤，2002）。井上（1998）は、PAC分析において、コンピュータによって客観的に析出されたクラスターの命名時に自己との対峙を迫られることが調査協力者の自己開示のきっかけになり、丁寧な対話によって信頼関係が形成されることを確認したと述べている。親の離婚・再婚という個人的な体験に関与するため、語る行為に付随する調査協力者の負担を軽減できると考え、この方法を選択した。

2. 調査協力者

2018年6月から8月にかけて、親の再婚によって、親の新しいパートナーとの生活を経験した継子4名に対してPAC分析を行った。調査協力者のステップファミリー経験の概要については、表1に示した。

表 1 調査協力者の一覧

	年齢	性別	所属	家族構成	離婚時期	再婚時期
Aさん	21歳	女性	保育士	実母、継父、実姉	保育園卒園前	小学2年生
Bさん	21歳	女性	大学3年	実母、継父、実弟	小学6年生	高校入学前
Cさん	22歳	男性	大学4年	実母、継父、実弟、実妹	小学5年生	中学1年生
Dさん	21歳	男性	大学4年	実父、継母	高校2年生	大学入学前

3. 調査手続き

はじめに、調査協力者の成育歴や家族構成といった情報を把握するために、事前のインタビューを行った後、「同居する実親」、「同居する継親」、「別居する実親」についての3回のPAC分析を実施した。最初に教示となる連想刺激文を提示した。連想刺激文は以下の通りである。

「あなたにとって〔同居する実親・同居する継親・別居する実親〕とはどのような存在でしょうか。また、あなたが〔同居する実親・同居する継親・別居する実親〕に対して抱くイメージや感情はどのようなものですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号のついたカードに、それぞれ一枚につき一つの言葉を20個程度記入して下さい。」

調査協力者がイメージを記入した後、重要度順位への並べかえ、連想項目間の類似度距離評定、類似度距離行列のクラスター分析を行った。変数となるクラスターは、内藤（2008）の「2～4分割の範囲で相対的により有効な解釈が得られる距離とすることを薦める」、また「分割の数が多すぎると、クラスター間の比較が多くなり、全体イメージをつかみにくくなる」という指摘を参考に、3つに分割することとした。

PAC分析では、析出された樹形図を用いた調査協力者へのインタビューを行う。類似度距離行列から作成された樹形図（図1～12）を調査協力者に提示し、クラスター1から下位の隣接した項目を読み上げ、項目同士に共通するイメージやそれぞれの項目が結節された理由として考えられることを聞き、そして調査協力者の言葉を用いて各クラスターの Kategorization（カテゴリー化）を行い、命名をしてもらった。ここでは、＜この2つを合わせるとどのような言葉になりますか＞といったように、カテゴリー化の段階における質問は最小限でとどめた。その際、調査者の発言は＜ ＞、調査協力者の発言は「 」で示している。一連のインタビューの記録は調査協力者に了解をとり、ICレコーダーに録音した後、逐語化を行った。

4. 倫理的配慮

調査の趣旨、そしてステップファミリーという概念及びPAC分析の概要を調査協力者に説明したのち、個人情報の取り扱いや公開範囲について了解を得た。また、侵襲性の高いテーマでインタビューを行うことから、調査の途中であっても、申し出によっていつでも調査を中止できること、質問内容によっては回答を拒否できることもあわせて説明した。

III. 結果と解釈

1. 結果の記載方法

クラスター分析樹形図、およびインタビューで得られたエピソードとその解釈を調査協力者ごとに示す。記号として、協力者が命名したクラスター名を〈 〉、連想項目を〔 〕、調査対象者の語りを引用したものは「 」内に斜体で記載する。

2. Aさんの事例

(1) ステップファミリー経験

E県出身の21歳の女性である。専門学校を卒業し、保育士1年目としてE県で働いている。Aさんの保育園の卒園前に両親が離婚し、Aさんが小学2年生の時に実母が2歳上の男性と再婚した。継父は初婚である。3歳上の姉は他県で就職したため、現在は実母・継父・Aさんの3人で同居している。別居する実父とは両親の離婚後も半年に1回の頻度で会っていたが、実母の再婚にともなって交流は途絶えたという。

(2) 同居する実親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

3つのクラスターは調査協力者によって、〈大きな感謝〉、〈うちの母らしさ〉、〈見本で反面教師〉と命名された。(図1)。

Aさんは、浮気や金銭問題で母親を困らせる父親との〔9 離婚は正解〕、現在が〔6 幸せそう〕であることから〔10 再婚も正解〕だと感じていると語った一方で、両親の離婚や再婚を経験することは〔8 娘への影響力大きい〕と指摘した。

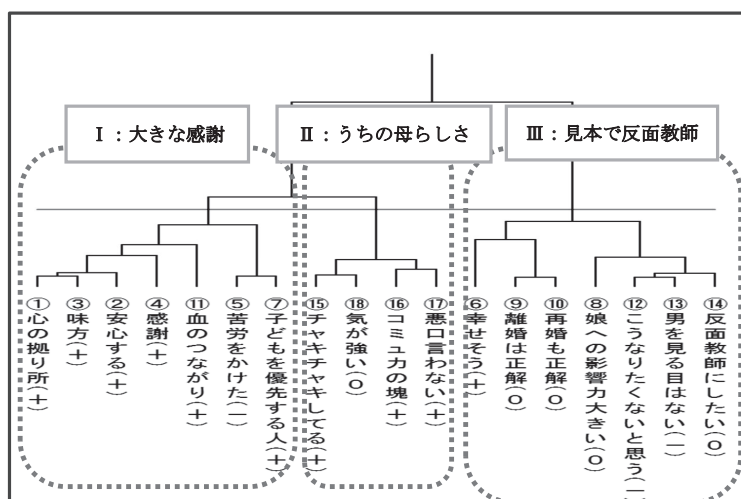


図1 クラスター分析樹形図 (Aさん・同居する実親)

② インタビューで語られたエピソード

【離婚・再婚への肯定的理解】

「後から離婚した理由を聞いて、ママに引き取られてよかったと思った。子ども2人抱えて生きていくための選択肢が再婚だったのかなって思うと、ママの人生変えちゃったのかもしれないと思ったことはちょっとある。(中略) ママの生き方を制限してしまった。」

【結婚観への影響】

「離婚して、再婚して、ママは幸せになれたと思うから、ママの選択をあれこれ言うつもりはなくて。でも、同じような人生歩みたくないと思う。」

「(母親は) 今はきっと幸せなんだと思う。お父さんがいい人だから。でも、それを見ながら、やっぱり私はこうなりたくないなって。離婚も再婚も経験したくはない。なんか、離婚も再婚も最初の結婚を失敗した結果みたいに思えちゃう。」

(3) 同居する継親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈恩〉、〈付かず離れず〉、〈人として尊敬〉と命名された。(図2)

クラスター I: 〈恩〉は、[1 感謝] という大きな風船のような膜の中に他の6項目が内包されているイメージだという。Aさんは継父との関係を [2 適度な距離ある] とし、具体的なイメージとして [14 親戚のおじさんの感覚] を挙げた。Aさんにとって [14 親戚のおじさん] は、高い自己開示が可能である一方で、両親ほど深くまで関わることは躊躇う相手だといい、継父はそれに近いという。また、Aさんは実父を [パパ]、継父を「19 お父さん」と呼び分けており、2人を完全に重なる存在としては見ていないと言った。

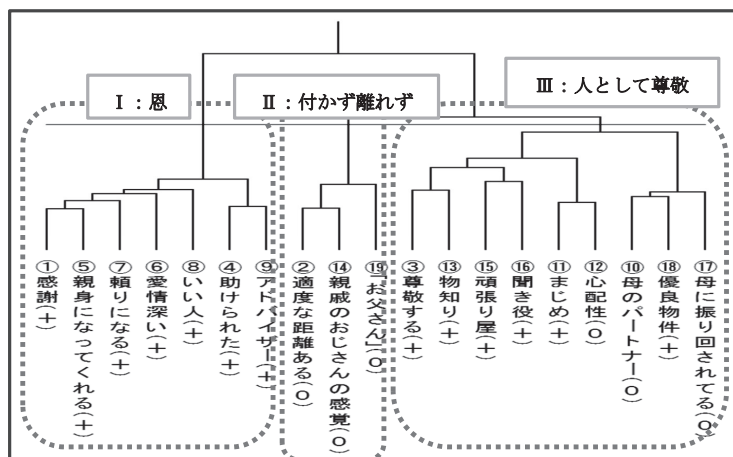


図2 クラスター分析樹形図 (Aさん・同居する継親)

② インタビューで語られたエピソード

【「お父さん」であり「親戚のおじさん」である継父】

「本当の娘じゃないのに、すごく良くしてくれた。(中略) 保育士になりたいってずっと言っていて、じゃあ(保育の勉強ができる) 学校行かなきゃねって(言ってくれた)。あ、行っていいんだ、お金出してくれるんだって思ってホッとした。」

「(継父とは) 距離があって、お互いそれは保っておこうみたいな。不可侵領域。(中略) お父さんが、今日からパパになるよとか言ったら、悪い方向にいったと思う。」

「血縁だけが家族じゃないよね。パパのことを家族って言うのはもう難しいけど、お父さんのことは家族だなんて思うし。」

【きょうだいに倣う】

「お姉ちゃんは再婚してからしばらくお父さんに冷たかった。私がまだ小2とかで、お姉ちゃんも10歳とかだったけど、誰だよこいつ、みたいな目で見てた。」

「お姉ちゃんがお父さんって呼び出したから、私もその真似をした。」

(4) 別居する実親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈複雑な感情〉、〈恋愛観への影響〉、〈愛された記憶〉と命名された。(図3)

Aさんは自身の恋愛観への影響について、自身の恋愛や結婚に対して必要以上に身構えてしまうと言い、「私は幸せになってやるって思う。恋愛に失敗するたびに、私も(離婚や再婚をした) ママたちみたいになるのかなって考えてしまう。」と語った。

また、[5 父としては及第点] という項目の下に [8 可愛がってくれた]、[9 愛されてはい

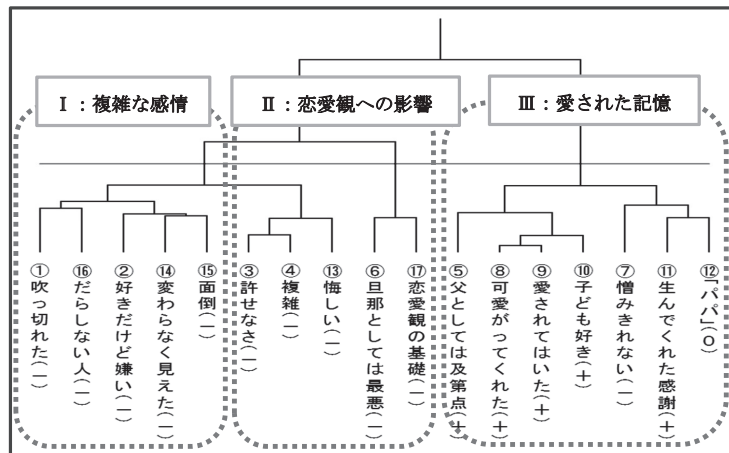


図3 クラスター分析樹形図 (Aさん・別居する実親)

た]の2項目が位置し、[11 生んでくれた感謝]と愛情を与えられた思い出が[7 憎みきれない]という気持ちにつながるという。[5 父としては及第点]は、クラスターⅡにある[6 旦那としては最悪]と対の表現になっており、「(実父は)女性目線という和最悪だけど、子ども目線という悪い父親ではなかった。」と話した。

② インタビューで語られたエピソード

「好きだけど嫌いって、自分で書いたけどすごい矛盾。これを見ると、私も(実父を)引きずってるのかなあって思えてきた。やだなあ。ママと一緒に。」

「離婚の原因がパパの不倫とギャンブルだったけど、私がショックだったのは、そんなものに私たち家族が負けたのかっていうこと。自分で言っちゃうけど、可愛い子どもがいるのに他に女作って金溶かしてきちゃうんだこの人って。そこは今でも許してない。」

(5) Aさんの事例の解釈

浮気やギャンブルにのめり込んで家庭を軽んじた腹立たしさもあり、実父に対するAさんの感情はネガティブなものであった。だが、愛されていた幼少期の記憶が残っているがゆえに憎みきれないという、アンビバレントな心情が吐露された。その一方で、「お父さん」と呼んで慕うなど、継父との関係は良好である。再婚後の継親子関係において、継親(お父さん)が親(パパ)になり代わるのではなく、同居する養育者として子どもを支援する役割にとどまったことが、再婚への肯定的な理解の要因の一つとして考えられる。また、実親子家族に加わった継父がAさん姉妹に受け入れられていく過程で、姉が先に継父に歩み寄り、それに倣うようにAさんも継父との距離を変化させている。年長のきょうだいの行動や考え方は年少のきょうだいへの影響力を持ち得るが、Aさんの継父受容にも姉の影響を窺うことが出来る。

3. Bさんの事例

(1) ステップファミリー経験

F県出身の21歳の女性であり、大学3年生である。小学6年生で両親が離婚し、母親が親権をもつ。高校に入学する春に母親が3歳下の男性と再婚した。継父は初婚である。2歳下に県外の大学に通う弟がおり、F県にある実家には実母と継父が暮らしている。実父とは離婚後一度も会っていない。また、Bさんは実父と継父を呼び分けておらず、2人とも「お父さん」と呼んでいたため、事例の記載においてもこれに従う。

(2) 同居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査協力者によって、〈離婚体験の傷あと〉、〈子どものこと見えてない〉、〈女友達みたい〉と命名された。(図4)

Bさんは、重要度の高い「1 越えるべきハードル」と「2 離婚より再婚の方がマシ」の2項目が軸になると述べた。また、「16 可愛げある人」と「17 一生懸命」についてはポジティブなイメージだと前置いたが、「13 ちゃんと好き」と言うこと自体が、私の中で母親を好きな気持ちが不安定な証拠のような気がする。」と解釈した。

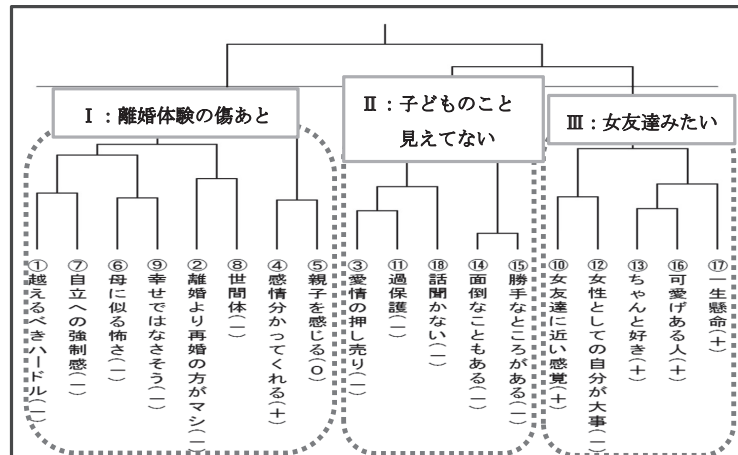


図4 クラスタ分析樹形図 (Bさん・同居する実親)

② インタビューで語られたエピソード

【母親を乗り越えるというプレッシャー】

「私は母を乗り越えていかなければ自分の人生を歩めない気がしていて。娘ってどうやって母に似る。普通ならそれで問題ないと思うけど、私は違うから。母親と違う娘に成長していかなきゃいけないし、その上で幸せを掴み取っていかなきゃいけないプレッシャーがずっとある。」

【両親が揃った家】

「お父さん (継父) がうちのお父さん (実父) でないことよりも、父親がいないってことの方がよっぽど恐ろしいことみたいに思っていました。今もその考えは変わってない。」

「再婚してくれてホッとした。これで普通に帰れると思ったから。」

<Bさんが言う、普通の家ってどんなものですか。> 「お父さんがいて、お母さんがいて。欠けてないっていう印象です。」

【実父を否定する母親について】

「子どもにとって、片方の親を否定されるのって、自分を否定されるのと同じなんですよね。父親と母親がいないと自分はこの世に生まれてこなかったから、血縁関係って子どもからしたらすごく大事な繋がりで。(両親が) 結婚しなかったら自分も生まれてこないわけで、だから、相手を選んだのが失敗だったって否定されたり、あんなのと結婚しなきゃよかったとか言われると、自分のことも別にいらなかったのかなと思う。それとこれとは違うはず

だって分かってても、(その考えは) 消えないです。」

(3) 同居する継親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈“普通”に戻れた〉、〈金銭的サポート〉、〈無意識の線引き〉と命名された。(図5)

Bさんによると、[1 普通に返してくれた] が何よりも重要で、継父の存在に感謝した一番の要素だという。[5 約束守る人] は「ぎょうだいはもう欲しくないと言ったことがあって、それを覚えててくれた」ことを振り返っての連想項目とした。

また、[9 やることやってくれる] の「やること」とは、Bさんにとっては教育費を含んだ養育費の負担であり、Bさんたち姉弟を大学に進学させてくれることだったと語った。継父が金銭面でのサポートを担うことで、Bさんは継父を [4 保護者] であり、家族の [11 内側の人] であると認識していったという。

さらにBさんは「今のお父さんを本当のお父さんだと思い込むような、自分を欺いてるような感覚で、辛かった時期もあった。」として、自分を欺く手段の1つとして [2 思い出の塗り替え] があったと語った。[2 思い出の塗り替え] とは、周囲に対して離婚後も実父と暮らしているように振る舞ったり、継父との出来事を実父と体験したことのように辻褄を合わせたりすることであり、その度に [13 申し訳なさ] が募ったという。

② インタビューで語られたエピソード

【再婚で得られた安心】

「救世主ですね。キリスト。(笑う) やっぱり、父親がいないことが怖かったというか、(周囲に) ばれたらどうしようって怯えてた部分もあったので、その状況を変えてくれたことが

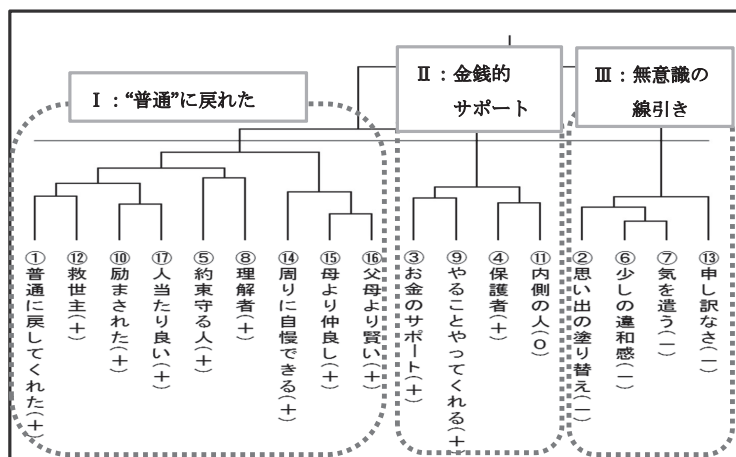


図5 クラスター分析樹形図 (Bさん・同居する継親)

すごくありがたかった。」

「再婚してしばらく経った今なら、うちは再婚なんだとか、お父さんと血が繋がってないことも言えるけど、離婚してた時とか再婚したばかりのときは絶対言えなかったし、ばれたくなかった。」

【血縁への思い】

「血の繋がりがってそんなに大事になって（思っている）。今は関わりが無い実の父親と、金銭的にも精神的にも助けてくれる育ての父親と。無関係の人間にお金をかけるってできないって考えたら、（継父は）本当にすごい人だなあって。」

【2人の父親がいる違和感】

「離婚した後もお父さん（実父）がうちにいるみたいに話を作ったり、（再婚した後は）2人のお父さんのことを1人かのように（周囲に）話してしまうことが何度もあって。週末どこに行ったとか、家族旅行とか。矛盾がないかいつも不安だった。」

「やっぱり、（実父と継父は）違うと思う瞬間が来るたび、申し訳なくなります。思い出話をするのにも、お父さん（継父）の顔色を窺っちゃう。前のお父さんの話をするの嫌じゃないかなとか、この話はお父さん（実父）出てこないからセーフかなとか、それが違和感に繋がっているんだと思う。」

（4）別居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈置いていかれた感覚〉、〈一番の苦しみ〉、〈引っぱり〉と命名された。（図6）

このクラスター内に共通するのは「1 捨てられた感」であり、「9 パパっ子だった自分」でも実父を「10 引き止められなかった」悔しさと、「11 娘でいるはずだった」という思い

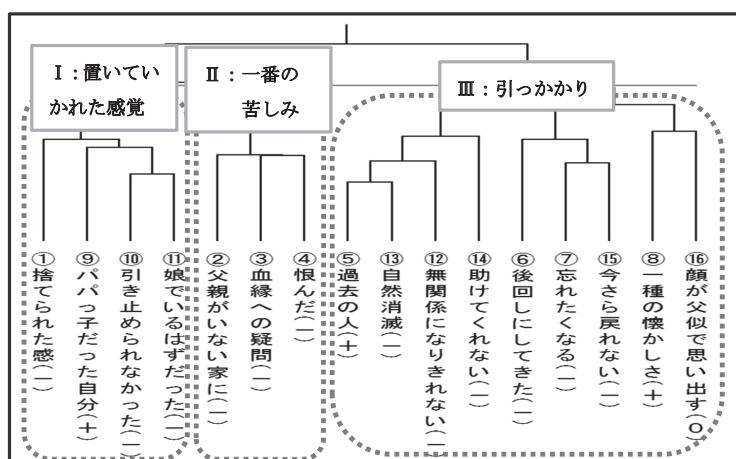


図6 クラスタ分析樹形図（Bさん・別居する実親）

があると語った。また、継父に失礼がないよう、実父のことは出来るだけ〔6 後回しにしてきた〕といい、それでも実父が思い出されるときには継父への申し訳なさから〔7 忘れなくなる〕、〔15 今さら戻れない〕といった感情が起ると語った。

② インタビューで語られたエピソード

【実父への愛着】

「お父さんを求めているのか、父親って存在だけを求めているのか自分でも分からなくなってきました。(中略) お父さんに懐いてたのは確か。立ち止まってほしかったというか、離婚しないでほしかったですね。」

「血が繋がっている家族だから、離れるとか会えなくなるとか考えなかった。でもお父さんがいなくなって、そんなに簡単にいなくなるのなら、血縁って何? と思ったし、(実父に対して) 腹が立った。」

【過去の人である実父】

「今の私を助けにきてはくれないし、それは今のお父さんがやってくれてる。(実父との) 関係は切れちゃってるんですけど、私の中ではまだ捨てきれない部分がある。」

「今のお父さんはお金とか進学面でたくさんサポートしてくれるけど、前のお父さんはそばにいないから (私に) 何も与えられない。」

【継父を裏切れない】

「考えるのを避けてきたというか、忘れよう忘れようと心がけてきたというか。だってもう今のお父さんを裏切れないし、昔のことは昔のことって片付けないとなあって。」

「今のお父さんにたくさん支えてもらったから、そこを裏切れない。前のお父さんに会いたいとか離婚しないでほしかったとか言うのは、今のお父さんに失礼だと思うから。」

(5) Bさんの事例の解釈

親の離婚後は「父親がいる家」、再婚後には「父も母も変わらない初婚家族」を演出しようと言われたことは、Bさんにとって、父母が揃った初婚家族が大きな意味を持つと思われる。離婚は父親の存在を失うだけでなく、父母が揃っている家族を喪失したネガティブな体験である一方、再婚は初婚家族と同じく父母が揃う家庭に戻れた安堵と、関係回避や衝突のない比較的良好な継親子関係が築かれたことを受けてポジティブな体験として想起された。Bさんの継父に対する肯定的な評価は、継父の金銭的サポートによる影響が多である。教育資金の捻出などの金銭面、また、進学など人生の選択場面における精神面でのサポートを継父が養育者として果たしたことが、Bさんが継父を受容する過程で重要な影響を及ぼしたと考えられる。

一方で、別居親である実父へは「パパっ子だった自分」のような深い愛着を窺わせる連想項目が挙がったが、自身の人生や考え方に一定の負の影響を与えた母親の生き方を否定しよ

うという姿勢が見られた。同性であるがゆえに母親の生き方を強く意識するという、青年期の渦中にあるBさんの心理発達の特徴もあるのではないだろうか。

4. Cさんの事例

(1) ステップファミリー経験

G県出身で22歳の男性であり、大学4年生である。小学5年生の時に両親が離婚した。2歳下の弟と4歳下の妹がおり、離婚後の3兄弟の親権は母親が持つこととなった。中学1年生の時に母親が再婚し、パートナーとなった継父は初婚である。離婚後の一時期、実父との文通が続いていたが、実母の再婚後はそれも途絶え、離婚後は一度も会っていないという。

(2) 同居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈母親への思い〉、〈無力さを痛感〉、〈自立する母親〉と命名された。(図7)

「8 謝られるのがいや」については、母親から「無理や我慢をさせてごめんね」と謝られることがあるといい、「ごめんって言われるのが辛い。こっちが申し訳なくなる。それ（「ごめん」という言葉）は子どもの、自分の台詞なんですよ。」と語った。

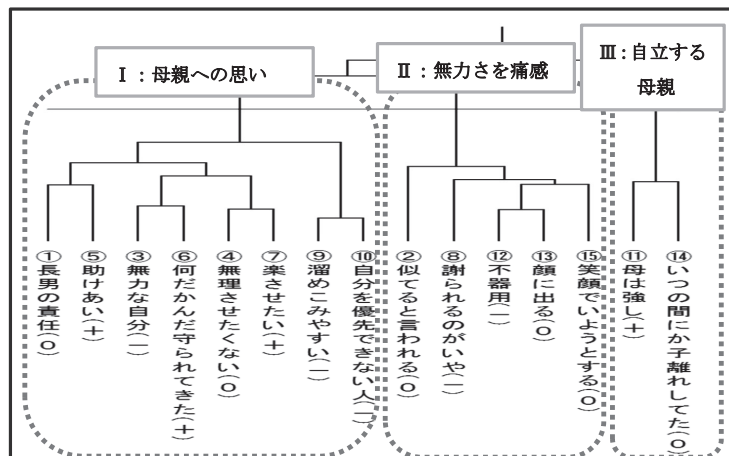


図7 クラスタ分析樹形図 (Cさん・同居する実親)

② インタビューで語られたエピソード

【家族を支えるという意識】

「離婚してから、大人の男が家にいなくなった。自分は一番上（の子ども）で、しっかりしなきゃいけないのに、（まだ子どもだから）結局母親に世話をかけてしまう。長男のくせに不甲斐ないし、悔しくなった。」

「責任感というか、義務感というか。こうやって母親とかきょうだいに頼られて、役に立ってこそ自分だなという気持ち。自己満足なんですかね。」

【親離れと子離れ】

「自分は親離れできてないなって思うことがある。こうやって、長男だからって家のことにこだわってる部分とか。自分で縛られに行ってる。(中略) 母親は自分に構わなくなるのが早かった気がしますかね。まあ男なんで、別にいいんですけど。」

(3) 同居する継親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈一方的なライバル視〉、〈気を許せない〉、〈将来への希望〉と命名された。(図8)

母親の再婚後、[10 大黒柱として機能]し、家庭の[11 経済的支柱]となっていく継父に[1 複雑]な思いを抱いていたと語り、継父がいることでCさんは[2 役目をなくした気分]になることから、[13 いなかったらを想像する]こともあったと述べた。

また、[5 疎外感]は母親と継父の夫婦関係の深まりと、継父が一家の大黒柱として信頼を得ていくなかでCさんが抱いた「弾かれたような感覚」のことだという。また、[7 どっちが異分子か]は[5 疎外感]を受けての連想項目で、Cさん自身と継父のどちらが再婚家族内で異分子なのかを考えてしまうと語った。

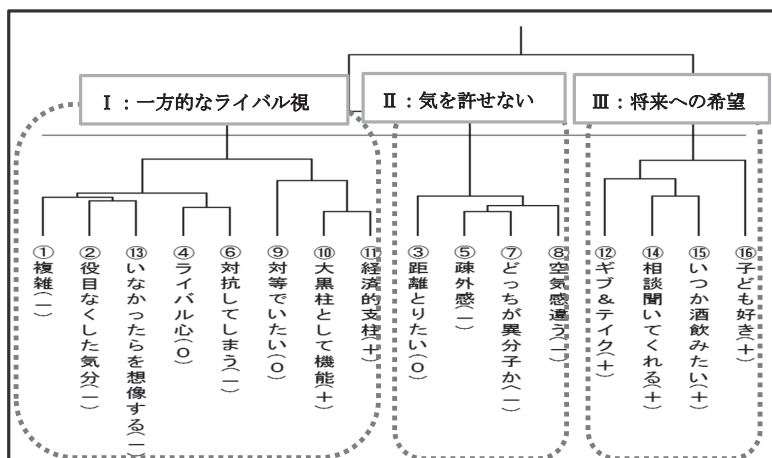


図8 クラスター分析樹形図 (Cさん・同居する継親)

② インタビューで語られたエピソード

【継父と張り合う】

「離婚した後は自分こそが家族を支えて引っ張っていく存在だと思ってて。再婚して、稼げる大人の男が家に入ってきて、俺稼げないし、やることないじゃん、ここにいるのに何も

出来ないって焦って。」

「(継父は) 悪い人ではなくて。でも自分の中で気持ちに収まりをつけられない部分があって、長男だってこととか、頼られたいとか力になりたいとか。それが全部(継父に) 持てられるみたいで、しんどいんですね。」

【自ら距離をとりながら疎外感を感じる】

「拗らせてるんですね。家族、弟とか妹が認めても俺は認めないぞ、みたいな。」

「元から家族の自分が、弾かれたように感じる事が多くて。後から入ってきたこの人(継父)の方がどう考えたって弾かれる理由があるはずなのに、1人のような気がしたこともありました。」

【大学進学に際して】

「高校までは(学費は) 出してもらおうと思ってた。でも、大学に行くのにかかる費用をあの人(継父)に払ってもらうのは気が引けた。」

「そのこと(学費)もあって、受験期は(継父と) 結構話をした。どこに行くとか、何を勉強したいとか、何になりたいとか。奨学金借りるって言ったら、大丈夫だから頼ってほしい、お金のことは就職するまでは助けてやれるからって(継父が言ってくれた)。」

「高校は半分義務教育みたいなものだけど、大学は行きたいから行く場所。それ(大学の学費)を出してくれて、話もかなり聞いてもらって、金銭的にも精神的にも支えられた。(継父の) ありがたさを一番感じた瞬間。」

(4) 別居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈記憶の中の良い父親〉、〈切り捨てたような感覚〉、〈理想像の裏側〉と命名された。(図9)

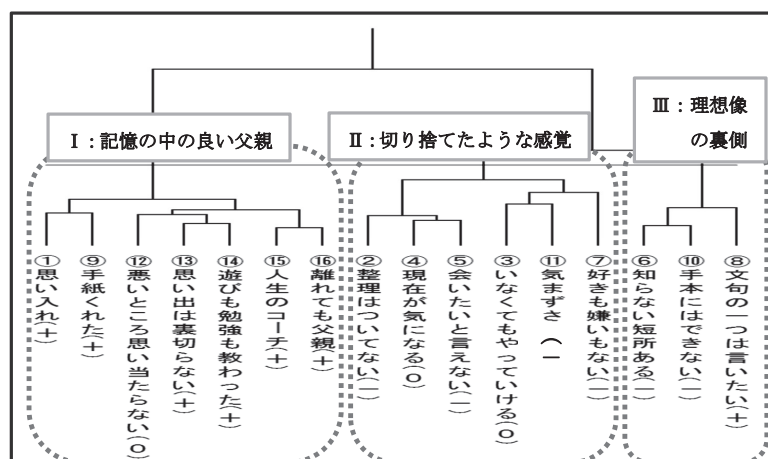


図9 クラスタ分析樹形図 (Cさん・別居する実親)

実父と楽しく過ごした記憶から「13 思い出は裏切らない」という連想項目がある一方で、「12 悪いところ思い当たらない」にプラスマイナス0の評価をつけたことについて、「自分ひとりの視点でしかないの。離婚するだけの理由が両親にはあったし、子どもには見えないこと。」と語った。その一方で、「5 会いたいと言えない」のは、母親や継父への後ろめたさがあるといい、また実父が「3 いなくてもやっていける」、継父がその役割を担えているという「11 気まずさ」があるとした。

② インタビューで語られたエピソード

【両親の離婚理由について】

「子どもの前で喧嘩する人たちがじゃなかったんで、どんなことで喧嘩してたとか、どっちが悪くて離婚したとか、そういうの全部知らなくて。価値観が合わないとか、ふわっとした説明は（両親が離婚するときに）もらったんですけど。」

「離婚するってことはそれなりの理由がある。悪いところが出てしまったとか、耐えられなくなったとか。うちもそうだったんだと、父親にも母親にも何かしらあるんだと思うことにしてます。」

【継父が父親を代行する】

「父親代行みたいな男の人が来て、家庭が家庭として動き出しちゃって。（中略）父親（実父）じゃなくても大きな支障が出ないことが普通にショックでした。」

「実の父親は一人だけだし、代わりはいないんですけど。父親っていう役割は代わられてしまっただなって。（再婚後の家族が機能しているのを）実際に見ちゃうと、納得するしかなかった。」

(5) Cさんの事例の解釈

実父に対する愛着や楽しかった記憶をCさんは連想項目に挙げる一方で、「父に対する感情が薄くなってきて」とも語り、実父との関係は離婚前の家族という記憶の中にとどめられている。実父が家族から離れ、継父が加わった再婚家族が滞りなく機能してしまったことへの戸惑いを見せた。ここでは「父親代行」という言葉で継父の役割が表現され、実父と継父の存在が重なり入れ替わることはなくとも、家庭内の役割は継親が代替できるという見方が示された。自身の家庭内での役割を奪っていく存在として、Cさんは継父を認識している。母親の再婚で、大人の男性が家族構成に加わったことにより、Cさんは自身の存在意義が揺らぐような心理体験をしている。しかし、大学進学における学費負担や進路相談が継親子関係にとって大きな転機となったようで、Cさんが継父を理解し、歩み寄ろうとする姿勢を見ることができた。

5. Dさんの事例

(1) ステップファミリー体験

H県出身の21歳男性である。高校2年生のときに両親が離婚し、一人っ子のDさんの親権は父親がとった。実父は公務員、実母は転勤族の会社員だという。高校は転校したくないこと、志望大学がH県内にあることから、父親が親権をとるのはDさんの意思を尊重しての選択だった。大学入学前に父親が再婚し、継母と生活を共にするようになった。実母とは大学4年生になった現在もメッセージアプリや電話などで連絡を取り合っている。

(2) 同居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈自立したい〉、〈父への不信〉、〈男親の不器用さ〉と命名された。(図10)

再婚により「12 家族意識」を強めた父親が継母とDさんに「気負わなくていい」と言いつつも親子らしく振る舞うことを期待する態度に「10 矛盾」を覚えたと述べた。

Dさんは「1 独り立ちを渴望」と「2 孤立感」の連想項目がクラスター命名に影響したといい、「世話になってる立場で言えないですけど、(家を) 出たいと思うことが多い。」と自立願望を語った。また、「4 放任」と「5 男の距離感」は再婚前の父息子関係のことであり、離婚があってもその関係は変わらず維持され、Dさんはそれが心地よかったと話した。しかし再婚後、父親の自身への関わりの持ち方に対して「しなくていいことまでやろうとする」という「8 気遣いのズレ」を感じたり、息子に接する際の父親の「7 戸惑いが伝わる」など、「5 男の距離感」が崩されそうになっていると語った。

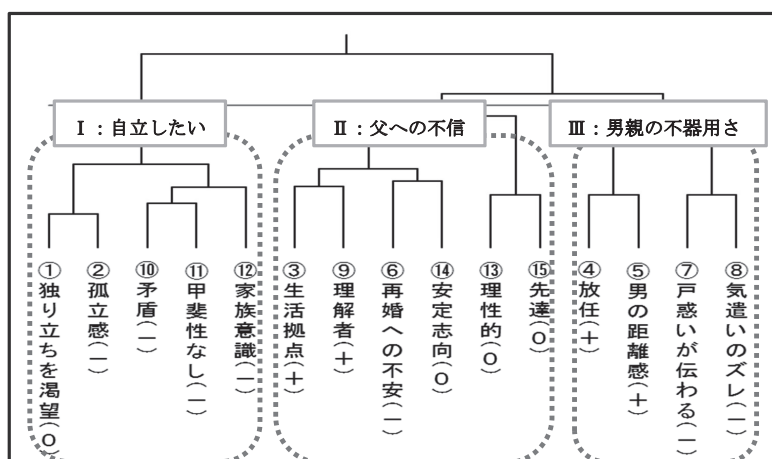


図 10 クラスタ分析樹形図 (Dさん・同居する実親)

② インタビューで語られたエピソード

【家が自分の居場所とは思わない】

「家族で住んでいるというより、夫婦が同居してるところに部外者の自分がある感覚。孤立感と書いたけど、寂しいとかは特に（思わない）。早いところ家を出たい。」

「〔生活拠点〕とは）生活する場所というそれだけの意味。父親がいることが安心するとか帰る場所とかではなく、私物があって寝て飯を食うだけの、屋根と壁がある場所。」

【父親との男の距離感】

「父親の、俺たちは家族だって意識が強くなった気がしてて。向こう（継母）には気負わずやれって言いながら母親らしくやらせようとするし、自分にはあんまり気にするなって言いながらこの人（継母）が母親だって押し付けようとする。この人（実父）こんなだったかなって。」

「再婚してから、変に関わろうとしてくるようになった。大学どうなんだとか、彼女は（いるのか）とか聞いてくる。母親の代わりをやろうとしてるのか知らないけど、今までそんなことしたことないのに、畑違いのところに手を出してる感がすごい。」

(3) 同居する継親についてのPAC分析

① クラスター分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈血縁とは違う〉、〈互いの努力〉、〈モヤモヤ〉と命名された。（図11）

Dさんによると、[1 干渉されない]、[2 母親ぶらない] は継母の態度であり、[3 継母感ない]、[5 母とは感じない]、[6 同居人] はDさんの態度や継母イメージ、[7 一線引いてる]、[12 他人行儀] は双方に共通する態度だという。また、[14 父が選んだ人] とは、継母は父

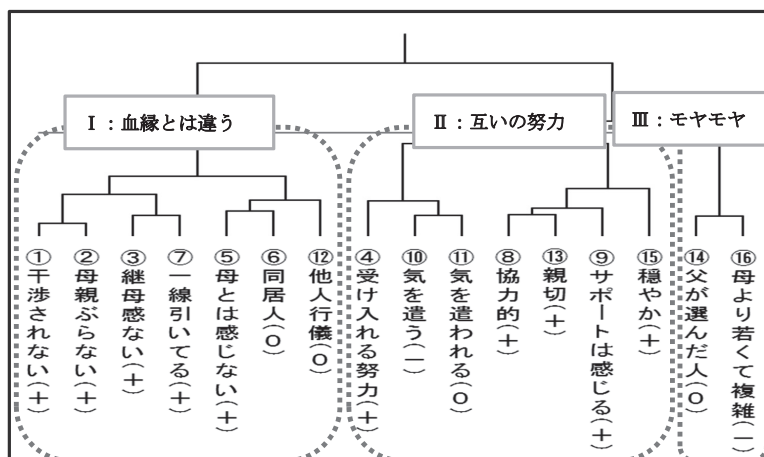


図 11 クラスター分析樹形図 (Dさん・同居する継親)

親の新しいパートナーであって自分の新しい母親ではないという意味で、[16 母より若くて複雑] は実母より年若い継母に「父親の（女性の）趣味を垣間見たような気がして、軽蔑とかは一切なく、ああ、そうなんだ、って。」と心境を振り返った。

② インタビューで語られたエピソード

【互いを受容しようと努力する継親子】

「お互いが頑張ってる。お互いが相手に気を遣ってるし、そっとしての感じです。」

「（継母は）元々が気遣い屋というか、相手の顔色を窺うタイプなんだろうなとは感じるし、ちょうどいいラインを探りながらいろいろ助けてくれる。」

【継母の位置づけ】

「（継母は）自分の結婚相手でもないし、母親代わりだと思ってるわけでもないの。別に変な人ではないと思うし、父の新しい奥さんってだけなので、まあ（2人の）自由にしてくれればって思います。」

「再婚だからそうなりやすいのかもしれないけど、（継母が）母親より（歳が）下なんですよね。たしか父とは10歳近く離れてて。ショックというか、呆れ、残念みたいなものがちよつとありました。そっちか!っていう。」

(4) 別居する実親についてのPAC分析

① クラスタ分析樹形図

PAC分析で得られた連想項目から3つのクラスターが析出され、調査対象者によって、〈離れたことへの後悔〉、〈自分を作ってくれた〉、〈尊敬と憧れ〉と命名された。（図12）

「7 教育係」はDさんの学業の頑張りを支えてくれた実母の役割を端的に表したもので、「母

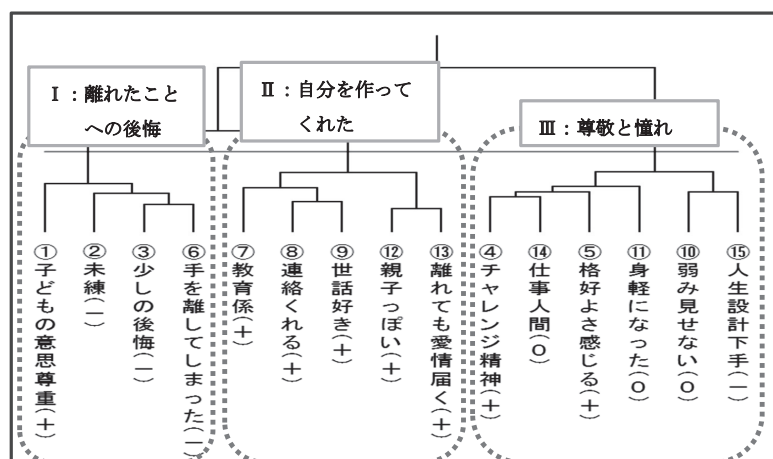


図12 クラスタ分析樹形図 (Dさん・別居する実親)

親に対する一番の感謝がこれかもしれない。」と振り返った。[8 連絡くれる]、[13 離れても愛情届く] など、両親の離婚後も交流があることで現在も [12 親子っぽい] と感じることができていると述べた。[11 身軽になった] という連想項目においては、結婚して家庭があること、扶養義務のある息子 (Dさん) がいたことによる「責任という形での荷物」から、離婚によって解放されたというDさんの解釈が語られた。

② インタビューで語られたエピソード

【離婚を振り返って】

「自分があんな高校を出たのも、今の大学に進学できたのも、母親があれこれ、叱咤激励っていうか、やってくれたのが大きい。」

「(父親のもとに残るという選択は) 自分で決めたこと。間違ってたんじゃないかなと思うつつ、これで良かったのかと振り返ることはあります。」

【現在の母親との交流】

「向こう (実母側) のばあちゃんを通して荷物が届く。自分が (祖父母宅まで) 取りに行く。(実母が自分のことを) 覚えてるんだなって。(中略) 父さんたちは知ってるのか知らないのか分からないけど、特に何も言ってこないから、ばれてたとして容認されてるんだろうなって。」

(5) Dさんの事例の解釈

離婚・再婚を契機として家族意識の強さを押し出してきた父親に対する抵抗感や不信感の生起とともに、「家族で住んでいるというより、夫婦が同居してるところに部外者の自分がいる感覚」というDさんの疎外感にもとれる自立願望もみてとれる。「(継母が) 母親より (歳が) 下なんですよね。たしか父とは10歳近く離れてて」という言葉には、父親の女性の好みが目立ってしまったことへの失望があったのではないだろうか。

継親子関係については、継子であるDさんだけでなく、継母もDさんと実親子のようにふるまうことを避けていることが特徴的だと言える。ただ、お互いを全く受け入れていないわけではなく、親子ではないという一線を引いたうえで同居する仲として互いに遠慮し、気を遣いながら関係を保っているようだ。

同居する実親・継親との関係に回避傾向が見られる一方で、別居親との関係においては実母への深い愛着と尊敬・憧れといった評価がなされた。Dさんは父親については現在の生活を担保してくれると感謝を述べるに留まっているが、Dさんの学習努力を後押しし、現在Dさんがいる環境作りに大きく寄与していた実母は、自身を高いレベルに押し上げてくれた支援者であるとともに、現在も社会人モデルの一人としてDさんの中に存在していると言える。

IV. 考察

1. ステップファミリーを経験した青年による3人の親評価

(1) 同居の実親との関係の再構築

親の離婚・再婚に伴う子どもの喪失体験や傷つきは、親自身が自分のことに手一杯で子どものケアができなかったりすることも要因として考えられる。子どもにとって、親の離婚・再婚という心的な外傷体験ともなり得る状況においては、[子どもを優先する人 (A)]、[感情分かってくれる (B)] のように子どもの体験に寄り添い、優先的・支持的に子どもの声を聴いてくれる同居親の姿勢を求めているのは言うまでもない。

[女友達に近い感覚 (B)] として、子どもを導く意識が感じられない実母を年代の近い同性の友人に譬えたり、[長男の責任 (C)] として実父の抜けた離婚後の家族を支えようとする発言もみられた。同居親に対して子どもが権威的な親イメージを持つことを諦めたり、同居親だけでは頼りない部分をカバーしたりするという、再婚家族特有の親子関係の再構築がみられた。〈自立する母親 (C)〉のように、離婚後に不安定になった同居親が新しいパートナーの支えを受けて安定する事例もあった。実親である同居親と継子（実子）は、幼少期に築かれた愛着の深い関係から、親の離婚・再婚というライフイベントを経て親が子どもを頼って寄りかかる関係性を抜け出し、親子関係がまた新たに再構築されるのではないだろうか。

(2) 継親が「実親ぶらないこと」への期待

4人の調査協力者のインタビューからは、あたかも実親のように振る舞い、権威を持って養育を行おうとする継親は存在せず、継子に対しては支持的な立ち位置にとどまっていた。[距離とりたい (C)]、[母親ぶらない (D)] という連想項目や、「(継親子間に) 距離があって、お互いそれは保っておこう (A)」という語りには、継親子の間にある一定の距離が相互の配慮によって保たれている姿を見ることができる。さらに、[アドバイザー (A)]、[理解者 (B)] のように、的確なアドバイスを授け、意思決定や進路選択を後押ししてくれた継親に対して、[親身になってくれる (A)]、[相談聞いてくれる (C)] といった継子からの肯定的評価を見ることができた。これは、緒倉ら (2018) が推奨している、継子にとっての身近で頼れる大人として、親の役割をサポートしながら関わっていく継親の姿だと捉えることができる。

継親がサポートする親役割に、子どもへの経済的支援がある。〈金銭的サポート (B)〉というクラスターや「本当の娘じゃないのに、すごく良くしてくれた。(A)」のように進学に際する経済的支援への感謝が多く語られた。大学や専門学校など、高校卒業以降の教育機関に進学することは、専門的な学問や技術を学ぶ自己研鑽の機会を得るだけでなく、同世代の友人や恩師との出会いを通した更なる成長の機会を担保することにも繋がる。高坂・柏木

(2017) は、親の離婚を経験した子どもの立ち直りには「親以外の他者からの受容・支援される経験」が必要だと述べているが、親の再婚を経験した継子にとっても、継親からの情緒的・金銭的サポートが継親子関係の大きな糧となっていた。

継親子関係は血縁関係のない他人であった大人と子どもが、再婚を機に周囲から「親子」として扱われるという「矛盾」から始まるが、子どもの戸惑いや抵抗は他者からは見えにくい。継親が継子に対して実親子のような関わりを求めずに、継子の成長をそばで見守り支える「身近で頼れる大人」としての役割に徹することは、継子との良好な関係を築くことに繋がる要素であると言えるだろう。

(3) 記憶の中の別居親との細い繋がり

梶井(2006)は親との離別を経験した大学生(一部高校生)を対象としたインタビュー調査から、再婚を経験した子どもは、実親に対しては「お父さん」「お母さん」という呼称が継続する場合がほとんどであったが、親の再婚相手(継父)の呼び名は多様であったと報告している。本調査でも、別居親へは「パパ」や「お父さん」、「母さん」のように親子意識の継続を窺わせる呼称が用いられていた。梶井が指摘するように、親が再婚する前の家族イメージが内的な家族として自己の人生に位置付けられており、最初の家族イメージが子どもの行動や態度に無意識的に影響を及ぼす面は大きい。

今回の調査協力者の4人は、別居親について、幼少期の情緒的な関わりが豊かであったが離婚によってそれが途絶えてしまい、交流がない別居親との関係を「過去の人」として諦めてしまっていた。しかし、その一方で、継親では代替できない同居親の存在を懐かしんだり、別居親を失ったことに苦しんだ様子もうかがえた。[可愛がってくれた(A)]、[離れても父親(C)]のように別居親との愛着関係を振り返る語りや、[無関係になりきれない(B)]、[未練(D)]、[少しの後悔(D)]のように別居親との関わりを求める語りからは、現在の自分に対する支援の有無に関わらず、共に過ごした日々の中で別居親に愛されていた記憶が、子どもと別居親を繋ぐ細い繋がりとして残されているのではないか。

2. 家族観の変容と家族意識の調整

4人の継子にとって、家族と言えるのは同居親と継親、きょうだいといった世帯を共にしている人物であり、別居親とは親子関係は継続しているものの家族には含まれないという認識が示された。「血縁だけが家族じゃない」というAさんの語りにみられるように、継親の支持的なかかわりによって家族観の拡がりを窺わせる事例もあった。だが、全体的には、同居親・継親・別居親ら全員を家族として見なすような、世帯を跨いだ家族観への変容を見ることはなかった。

その一方で、「普通(の家族)に戻してくれた(B)」という発言にみるように、継子が周囲の家族イメージに合わせるようにして家族意識を調整する姿が見られた。梶井(2006)は、

親の離婚を経験した子どもには、自分の現在の家族が「他者が持っている家族の基本イメージと合っていないのではないか」という懸念があると述べている。「父親・母親・子ども」が揃い、父母の夫婦関係と血縁の親子関係によって成り立つという家族の基本イメージは、ステップファミリーには当てはまらない。親の再婚を経験した青年継子も同様に、自身の家族イメージを周囲が持つ家族の基本イメージと照応しながら、「家族とは何か」という問いについて常に自問しているといえる。新たなパートナーとの関係の形成に目が向きがちな親の体験とは異なり、継子が経験する家族意識の複雑さへの認識が周囲の大人からされにくいのもその背景の一つであろう。

3. 青年継子による親の再評価

本研究で調査した4人の継子はいずれも青年期後期である大学生年代であり、親からの心理的自立に伴って、親との関係のあり方にも変化がみられる時期である。さらに、親の離婚・再婚が自身の親子関係を評価する際の大きな出来事として顧みられることもある。野口(2012)は、理想化や見下げではなく、現実的な一人の人間として両親を捉えられるようになることが、親の離婚・再婚を経験した子どもの発達に必要であるとしている。親の離婚・再婚といった出来事により、同居親や別居親、そして継親との関係に子どもは悩まされやすい。子どもに対する養育者たちのかかわりのあり方によっては、継子たちの親イメージは過度の「理想化」や「見下げ」といった、盲目的あるいは否定的な見方になってしまうこともある。偏った親イメージについて「親も1人の人間なのだ」という、現実的な認識へと編み直していく作業が継子には必要である。今回の調査を通してみられた4人の体験から、親子関係の再構築、そして再評価はその作業過程で行われるものだといえる。青年継子は3人の親と向き合い、親のイメージを捉え直すと同時に、親の離婚・再婚という体験を整理し、自分の人生の一部として統合していく。そうして、親からの心理的自立を果たし、自らの生き方を見つけ出すのではないだろうか。

V. 今後の課題

少数事例であるがゆえに、調査協力者の個別的な体験について丹念に考察することができたのは本研究の成果であるが、その一方で、ステップファミリーを経験した継子の親評価や家族観の多様性を述べるには不十分であった。また、4名の継子は高校を卒業した後に大学や専門学校への進学を果たしていた。親評価を語るうえで、学業達成やそれを支えたであろう経済的安定は肯定的評価を与える要因になり得るであろうことを鑑みると、学業達成が叶わなかったり、家計に余裕がなく相対的には貧困家庭で育った継子の親評価はまた異なってくることを認識する必要がある。

VI. 文献

- 井上孝代 (1998) カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造) 分析の効果. 心理学研究, 69 (4), 295-303.
- 早野俊明 (2008) 日本におけるステップファミリー (子連れ再婚家族) の法規制. 白鷗大学法政策研究所年報, 2, 107-114.
- 梶井祥子 (2006) 家族意識の変容過程ー親の離婚を経験した子どもの事例調査からー. 北海道武蔵女子短期大学紀要, 38, 39-60.
- 勝見吉彰 (2014) ステップファミリーにおける親子関係に関する研究ー子どもの視点からの検討ー. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 14 (1), 129-136.
- 高坂康雅・柏木舞 (2017) 親の離婚を経験した子どもが立ち直るまでのプロセス. 和光大学現代人間学部紀要, 10, 113-121.
- 内藤哲雄 (1997) PAC分析の適用範囲と実施法. 信州大学人文学部人文科学論集, 31, 51-87.
- 内藤哲雄 (2002) PAC分析実施法入門 改訂版. ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄 (2008) PAC分析研究・実践集 I. ナカニシヤ出版.
- 野口康彦 (2012) 親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究ー学生と成人を対象にしてー. 風間書房.
- 野沢慎司 (2005) 離婚・再婚とステップファミリー. 吉田あけみ・山根真理・村井潤子 (編著) ネットワークとしての家族 (2005). ミネルヴァ書房. pp.139-157.
- 野沢慎司・菊地真理 (2014) 若年成人継子が語る継親子関係の多様性ーステップファミリーにおける継親の役割と継子の適応ー. 明治学院大学社会学部附属研究所年報, 44.
- 野沢慎司 (2015) ステップファミリーの若年成人子が語る同居親との関係ー親の再婚への適応における重要性ー. 社会イノベーション研究, 10 (2), 59-84.
- 小田切紀子 (2004) 離婚を乗り越えるー離婚家庭への支援をめざしてー. プレーン出版.
- 緒倉珠巳 (2018) 子どもへの配慮. 野沢慎司編. ステップファミリーのきほんをまなぶ: 離婚・再婚と子どもたち. 金剛出版. pp.45-50
- Stepfamily Association of Japan (2017) ステップファミリーのおとなのためのきほんブックレット改訂版, 13-14.